

# 聖書ヘブライ語と現代ヘブライ語

— アイデンティティーを求めて —<sup>1</sup>

**Biblical Hebrew and Modern Hebrew**

—A Quest for Identity—

アダ・タガー・コヘン

Ada Taggar-Cohen

キーワード

聖書ヘブライ語、現代ヘブライ語、イスラエルの言語、ヘブライ文学

KEY WORDS

Biblical Hebrew, Modern Hebrew, Israeli language, Hebrew literature

要旨

ヘブライ語は多層からなる言語である。今日おもにイスラエルで話されている現代ヘブライ語はその最新の段階にある。本稿はヘブライ語の諸層を概観する。ヘブライ語は何世紀もの間、ユダヤ人にとって聖なる言葉であり、彼らに宗教的なアイデンティティーを付与してきた。19–20世紀に復興した現代ヘブライ語は非宗教的な文脈で用いられる。この変化は、現代のユダヤ人が自らの言語を「イスラエル・ヘブライ語」と呼んで、古代ヘブライ語が付与するのは異なるアイデンティティーを求めていることと関連している。

SUMMARY

The history of Hebrew presents us with a multilayered language, its last stage being Modern Hebrew, as it is spoken mainly in the State of Israel today. This paper surveys the different layers upon which Modern Hebrew has been built, focusing on certain trends and meaningful developments. The current form of the Hebrew language is broadly described, while explaining how it differs from its roots in Biblical Hebrew. Hebrew has been a sacred language for the Jews for many

centuries, and it has given them their religious identity. Through its revival in the 19<sup>th</sup> and 20<sup>th</sup> centuries, Modern Hebrew has transformed itself to non-religious usage. This change is entwined with the creation of the modern Jewish identity, which has led to what some term "Israeli Hebrew," and this is discussed in the following paper.

## 1. 序

「ヘブライ語が母国語ではない学生たちにヘブライ語を教えるとき、聖書ヘブライ語と現代ヘブライ語のどちらを先に教えるか?」。25年にわたり、ヘブライ語を母国語としない学生に両者を教えてきた筆者がよく受ける質問である。筆者は決まって次のように答える。「現代ヘブライ語から始める。ヘブライ語を生きた言語として体験し、ヘブライ語で会話できるようになってから、聖書ヘブライ語とそのより複雑な様式を教える」と<sup>2</sup>。ということは、現代ヘブライ語は聖書ヘブライ語より単純、または異なる言語様式というのか? もしくは、現代ヘブライ語は聖書ヘブライ語ほど格調高い言語ではないというのか。答えはイエスでもありノーでもある。

現代ヘブライ語はヘブライ語の歴史における一段階である。ヘブライ語は、様々な変化や逸脱を経てきたが、基本的に、聖書のテキストから今日まで続く一つの同じ言語である。この言語は、他の言語と接触を繰り返しながら、様々な歴史的段階をたどった。今日もその発展途上にある。しかし、その中核は、聖書ヘブライ語であり、聖書にみられる語彙と文法である。もちろん、動詞の活用、意味などの変化による違い、文章構造の変異を考慮に入れなければならない<sup>3</sup>。他方、このようなヘブライ語の連続性を主張する見解とは対照的に、現代ヘブライ語を「イスラエル・ヘブライ語」と呼び、古代ヘブライ語と今日のイスラエルで使われている現代ヘブライ語を明瞭に区別しようとする主張も最近表れている<sup>4</sup>。

本稿では、聖書ヘブライ語-現代ヘブライ語を一つの言語の展開史として捉え、ヘブライ語の源泉を明らかにした上で、特にネイティブ・スピーカーの母国語としての現代ヘブライ語の複雑な状況と、ユダヤ人やイスラエルの人々にとってのヘブライ語の新しい意義を指摘したい<sup>5</sup>。

## 2. 聖書ヘブライ語の学習

非ユダヤ人研究者の多くがヘブライ語に最初に出会うのは旧約聖書を学ぶ時であ

る。つまり聖書ヘブライ語である。この聖書ヘブライ語は多くの例外を含む文法規則として教えられる。学生たちは、どのように発音するか確信できぬまま、多くの様式を習得しなければならない。言語学者のように文法的に分析させられる。しかし、大部分の学生は言語学者ではない。聖書文学協会 Society of Biblical Literature (SBL) のフォーラムで、この問題が提議された。「我々は聖書ヘブライ語をこのような方法で教え続けて良いのか」。議論は二つの陣営に分かれている。

この問題について、William P. Griffin が、最近 SBL フォーラムに長大な論考を発表し、大胆な変革を求めた<sup>6</sup>。Griffin は、聖書ヘブライ語の教授の変革のために「マソラ式母音記号を強調しないこと」を提案した<sup>7</sup>。現代ヘブライ語がニクードなしで書かれることは、その論拠になるかもしれない<sup>8</sup>。現代ヘブライ語を学ぶ学生たちは、母音記号なしで読み書きさせられる。学習初期に母音記号を用いたとしても、すぐにそこから離れる。この学習方法は、イスラエル人の子供が小学校一年生でヘブライ語の読み書きを学ぶ方法と似ている。子供たちは母音がないことを問題にしない<sup>9</sup>。

更に、Rachel Halabe が2008年3月 SBL のフォーラムにて賛成見解を述べた。聖書ヘブライ語に関する論考で、彼女は、古代言語も学術的に教えられる場合、第二外国語のように取り扱われるべきだと主張した<sup>10</sup>。つまり、初心者レベルの文法書は、歴史的背景、文学的背景などまで広く踏まえるべきだと言う。

近年、欧米、及びオーストラリアでユダヤ学への関心が高まっており、新設の学部では、現代ヘブライ語の専門家を求めているが、彼らは、聖書ヘブライ語、それ以降の時代のヘブライ語の知識も当然知っていると思われる。

現代ヘブライ語の構造を理解するために、それを構成するヘブライ語の各時代層について概論しよう。

### 3. 多層言語としての現代ヘブライ語

現代ヘブライ語は、数千年の歴史を経て育まれてきた語彙、構文、文法、イディオム（慣用表現）が積み重なった多層言語である。この言語は、イスラエルの地（あるいは、今日研究者が好む用語では「東地中海地域 (the Levant)」) で、生きた言葉として、また書き言葉として使われ始めた。それ以後2500年にわたり、ユダヤ人が離散、また移民した世界のあらゆる地域に伝播していった。それゆえ、ヘブライ語の歴史は、ユダヤ民族史に直結する。ヘブライ語はカナンの地で「イスラエル」と呼ばれる民族の話し言葉として生まれ、その後、何世紀にもわたって、日常生活の話し言葉ではないが、祈りと学問の言語として世界中のユダヤ人が使ってきた。そして、19、20世紀になって、生きた話し言葉としてヘブライ語は復活した。ヘブライ語は、今日

イスラエル国における主要言語であり、アラビア語と並ぶ公式言語となっている。イスラエルの内外を含めて700万人のユダヤ人がこの言語を日常言語として話している<sup>11</sup>。

以下、ヘブライ語の歴史的発展を概略し、現代ヘブライ語の今日的な位置づけと現代ヘブライ語が以前の段階からどのように変貌したかを詳述する<sup>12</sup>。

### 第1段階—聖書ヘブライ語

ヘブライ語は約3200年以上の歴史がある。現存する最も古い碑文は紀元前1000年初期に遡る。ヘブライ語はセム系言語の中でも「北西セム語」と呼ばれる言語群に属する。この言語群は、さらにカナン系言語とアラム系言語に二分され、このうちカナン系言語に、フェニキア語、アンモン語、モアブ語、エドム語、ヘブライ語が入るとされる。しかし、ヘブライ語は、フェニキア語と古代アラム語の間にあるとも考えられている。後半の数世紀にわたって、聖書ヘブライ語はアラム語の影響を受け、最終的に、ユダヤ人の話し言葉はヘブライ語からアラム語に変わっていった<sup>13</sup>。

近年、Anson Rainy は、考古学上の新しい発見や言語学的評価に基づいて、古代聖書ヘブライ語は、アラム語、モアブ語、アンモン語などの言語群が関係するヨルダン以東の言語に属すると論じている。Rainy の2006年の BAR からの引用。

つまり、ヘブライ語はカナンの言語ではなく、ヨルダン以東の言語 (Transjordanian language) である。[···] Gary Rendsbug は、「(もし、Andre Lemaire の新しい読みが実証されるなら) ヘブライ語、アラム語、モアブ語には、それぞれ特有の『ある・存在する』という動詞がある。その語根は、H.W.Y あるいは H.Y.Y である。この動詞はフェニキア語 (カナン語) やウガリト語にもみられない。これら二つの地中海沿岸の言語の『ある・存在する』は、別個の動詞である。しかも、イスラエルの固有の神名—ヤハウエ Yahweh はこの『ある・存在する』という動詞から派生している！これは、古代ヘブライ語とヨルダン以東の言語群に密接な関係があることを示し、イスラエルの起源を考える鍵となる。

(([http://www.bib-arch.org/bswb\\_BAR/Rainey/bswbRaineyMainPage.asp](http://www.bib-arch.org/bswb_BAR/Rainey/bswbRaineyMainPage.asp))

A.Rainy に従うならば、ヘブライ語とその話者の起源は、ヨルダン以東 (Trans-Jordan) にあり、おそらくアラム語を話す部族の近親であったと考えられる。これは旧約聖書『創世記』(24章10節；25章20節；28章5節；31章20節以下など) の記述からもうかがえる。この時代のヘブライ語は、他の多くの言語と同じく、おそらく様々な方言があったと考えられるが、今日、想定されているのは主に二つの方言である。そ

これは、北イスラエル方言と南ユダ方言である。しかし、この二つの方言がどの程度別個のものであったかについての見解は一致しない<sup>14</sup>。その時代のヘブライ語の情報の大部分はヘブライ語聖書（旧約聖書）と、近年、考古学の発掘で発見されてきている碑文である<sup>15</sup>。

### 第2段階—聖書ヘブライ語からラビ・ヘブライ語

通常、ヘブライ語の歴史的段階は、聖書（あるいは古典）ヘブライ語、ラビ（あるいはミシュナ）ヘブライ語、中世ヘブライ語、そして現代（あるいはイスラエル）ヘブライ語に分けられる。

聖書ヘブライ語はヘブライ語の中核である。聖典に基づいてヘブライ語は時代を超えて保存されてきた。時代、地域を異にする様々な聖書の写本が今日残されているが、これらの写本が本質的に同一であり、ごくわずかな相違点しかないことは特筆すべきである<sup>16</sup>。それは、第二神殿時代に書記という職が生み出されたためと考えられる。そして書記の地位は、ミシュナ時代（紀元後2世紀）以降、更に発展した。書記は写本の筆写と教育の責任を負っていた。タルムード時代末期には、聖書テキストの筆写に関する一連の規則が生まれ、書記は専門的な写本筆写者となった。ラビ・ヘブライ語時代には、聖書ヘブライ語に加え新しい語彙や表現が生まれ、ヘブライ語は特に学問のために使い続けられ発展した<sup>17</sup>。

紀元前4世紀から前2世紀にかけ、イスラエルの住民は、次第にヘブライ語以外の言語を使い始めた。主にアラム語とギリシャ語である。ディアスポラに生きるユダヤ人は日常生活でヘブライ語を使うことはなく、聖書はギリシャ語やアラム語に翻訳される必要があった。紀元後2世紀ごろから、ヘブライ語は、主として聖典の言葉となり、学者が使う言語、または祈りの言語となった。

### 第3段階—中世ヘブライ語

ヘブライ語の第3段階は中世である。紀元後7世紀ごろから15世紀まで、ヘブライ語を使うユダヤ人は二つの異なる宗教世界にあった。一方はイスラーム世界であり、他方はキリスト教世界である。西アジア、中央アジア、北アフリカ、スペインまで支配したイスラーム支配下で、ユダヤ人はアラビア語の中で生活した。一方、キリスト教世界であるヨーロッパでは、ユダヤ人共同体は、ドイツ語、フランス語、ラテン語、イタリア語などのインド・ヨーロッパ語族の影響を受けた。この時代、ヘブライ語は主としてイスラーム世界で著しい発展をみた。アラビア語文法の存在がヘブライ語文法をもたらした。スペインのラビ・Yehuda Hayyuj は最初のヘブライ語文法書をアラビア語で完成させた。この Hayyuj の書は、後にラビ・Abraham Iben Ezra (c.1140) に

よってヘブライ語に翻訳され、ヨーロッパのユダヤ人共同体に紹介された<sup>18</sup>。

10世紀から13世紀には、スペインのユダヤ人共同体で、ヘブライ文学、世俗詩及び宗教詩そして哲学が繁栄した。また、ヨーロッパのユダヤ人共同体でも、ヘブライ語は日常語ではなかったが、学問の上で使われ続けた。

興味深いのは、宗教詩のピユート *piyut* と 宗教詩人であるパイタニーム *paytanim* のヘブライ語である。東方で朗詠されたピユートのヘブライ語は、ラビ・ヘブライ語の時代にイスラエルで話されていたヘブライ語を継承すると同時に、多くの変革ももたらした。ピユートはシナゴグで歌われ、共同体の生活と深く関わる内容で、一種の聖典のミドラシュ（「解釈」）でもあった<sup>19</sup>。

こうして、聖書のイスラエルの民の子孫を自認し、今日ユダヤ人と呼ばれる人々は、紀元後70年のエルサレム第二神殿崩壊によってユダヤ人の物理的国家としての独立が失われてからも1900年にわたり、ヘブライ語を聖なる言語として守ってきた。ヘブライ語は決して滅びた言語ではない。ユダヤ人の学者は、宗教的な注釈、法的裁決、哲学、言語学、数学、詩文の領域で、そして私的な意思疎通手段として、ヘブライ語を使い続けてきたのである<sup>20</sup>。

#### 第4段階—ハスカラー時代のヘブライ語

18世紀初頭のヨーロッパにおいて、ヘブライ語に大きな変化が生じた。この時代は、ヘブライ語でハスカラー時代「啓蒙時代」と呼ばれる。この時代は、近代ヘブライ文学のルネサンスにも当たる。17世紀—18世紀には、ヘブライ語で新しい近代小説や詩が書かれた。1783年に刊行されユダヤ人の最初のヘブライ語新聞 Ha-Ma'assef は、ハスカラー時代のユダヤ人、つまり近代の「啓蒙された」ユダヤ人に、ユダヤ的な事象をヘブライ語で著す契機となった。そして、長い間、テキストの中だけに凍結されていた言語に、新しい様式や語彙を提供し続けることになった。Mozes Mendelssohn や Naphtali Herz に代表される当時の作家たちは、聖書様式の美しいヘブライ語を書いたが、同時に新しい語彙も使った。ユダヤ人の学者たちは、ユダヤ人の精神文化をより豊かにするために、普遍的な知識を伝える多くの書をヘブライ語に翻訳した<sup>21</sup>。その結果、それ以前のヘブライ語層には存在しなかった新しい語彙が必要になった。また、ユダヤ人の学者たちは異なる時代のヘブライ語、すなわち、聖書ヘブライ語、ラビ・ヘブライ語、中世ヘブライ語を、同じテキスト内で同時に使うことも始めた。これらは、19世紀—20世紀の現代ヘブライ語の再興につながっていく。

#### 第5段階—現代ヘブライ語

19世紀のヨーロッパ、主に東ヨーロッパ諸国のユダヤ人はヘブライ語に新しいアプ

ローチを試みた。19世紀初期から中期にかけてのヨーロッパでは、新しい政治的野心、民族主義が芽生え、強固な民族アイデンティティー意識が生まれた。これは、ヨーロッパ中の様々なユダヤ人共同体の若い知識人の心を捉えた。彼らは、宗教の上だけでなく、一つの民族としてのアイデンティティーを求めて、ユダヤ人集団や組織の設立を進めた。中でも最も重要で影響力があったのが、テオドール・ヘルツェル Theodor Herzl が1897年公的に提唱したとされるシオニズム運動である。この運動は、ユダヤ人が、自分たちの父祖の地であるイスラエル、当時パレスチナと呼ばれる地に帰還することを求めた。そこでならば、ユダヤ人は、ユダヤ人の国家を再建し、生活し、自分たちの文化遺産と宗教的習慣、アイデンティティーを臆することなく維持することができる考えた。これにより「民族の言語」としてヘブライ語を復興することは、緊急の要請となった。ユダヤ教はその本質において、ユダヤ人のアイデンティティーを民族性と宗教性に置くため、特に長い歴史を通して嫌悪と暴力にさらされていたヨーロッパのユダヤ人の多くは、シオニズムの考えを受け入れたのも当然であった。ユダヤ人のアイデンティティーとして確実な共通項の一つが、あらゆるユダヤ人共同体で依然として使われる古代ヘブライ語であった。そして、今やそれが宗教的なアイデンティティーよりも、むしろ民族としてのアイデンティティー形成のために不可欠の手段となった<sup>22</sup>。

エリエゼル・ベン・イエフダ Eliezer Ben-Yehuda は、現代ヘブライ語の発展に新しい時代を切り開いた人物である。彼は、イスラエルの地でユダヤ人が独立した生活を築くためには、日常生活でヘブライ語を使うことが不可欠だと考えていた。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ヘブライ語の文化的中心は、当時、オスマン帝国の一部であり、その後イギリスの委任統治地となるパレスチナに移行した。彼は、パレスチナに移住しユダヤ人の共通のヘブライ語を通してユダヤ人のアイデンティティーを確立させたいと考える知識人グループの一人だった。そのような知識人は当時増加していた。1881年、ベン・イエフダはパレスチナに渡り、1890年学識者の組織「Va'ad Ha-Lashon 言語委員会」を設立し、復興ヘブライ語の新しい語彙や構文の発展を促進した<sup>23</sup>。多くの学者が、日常言語としてヘブライ語を復興させるには、話し言葉と書くための規則が必要だと考えた。しかし、現代ヘブライ語は、規則を超えて、生きた言語として、自然に、急速に発展した。Haim Rosen が、その著書 *Ha-Ivrit She'llanu* (我々のヘブライ語) (1955年) で示したように、「イスラエルのヘブライ語」には、インド・ヨーロッパ語族の構文の影響を受けた新しい様式や、移民たちが持ち込んだ自国の言語の語彙が取り入れられた。Saenz-Badillos の一節を引用しよう。

非ヘブライ語の土台が、この言語の内的発展に更なる影響を及ぼした。また、古

典期と比較すると、現代ヘブライ語は聖典や典礼のヘブライ語とは、さして密接な関係はない。一般のヘブライ語の話者は、公的なヘブライ語教育を受けていても自分自身の文法法則を編み出している。

ヘブライ語は、新しい段階に入った。これを「イスラエル・ヘブライ語」と呼ぶ学者たちもいる。このヘブライ語は、現在も進行中の言語であり、イスラエルの新聞、テレビ、文学で使われている言語である<sup>24</sup>。

現代ヘブライ語の学習者を悩ませるのは「どれが正しい発音か」という問いである。答えは「これもあれも正しい」。現代ヘブライ語は、その起源に直結しているわけではないので、聖書ヘブライ語が如何に発音されていたか実際に知る者はいない。イスラエル建国以来、様々な国から移民がやってきて、彼／彼女の母国語の発音をイスラエルにもたらした。ヘブライ語の発音は、時代と場所によって決まるものであり、常に変化し続けている<sup>25</sup>。

#### 4. 現代ヘブライ語と聖書ヘブライ語との差異

聖書時代のヘブライ語と現代ヘブライ語との間には2000年の隔たりがある。そのため、同一言語として扱ってよいのかと常に問われる。今日の研究者の多くは、時代の異なるヘブライ語は、二つの異なる言語として、その相違点を強調する。Ghil'ad Zuckermann は次のように言う。

イスラエルで今日話されている言語は、セム語・ヨーロッパ語の半ば人工的なハイブリッド言語である。この言語を何と名付けようと、この言語の複雑性を理解し、受け入れなければならない<sup>26</sup>。

聖書ヘブライ語にはそれが扱う主題があるので、その語彙は限られており、特に21世紀を生きる話者にとって不十分である。聖書の話の殆どは、宗教的領域、行為に関係しており、従って何世紀にもわたって聖なる言語とみなされてきた。そのため、ヨーロッパの正統派ユダヤ教徒たちは、現代ヘブライ語の復興に反対し、エルサレムでのベン・イェフダの活動に強く反発した。今日のイスラエルでも、彼らは現代ヘブライ語を彼らの間で話すことを避けている。彼らは、「聖なる言語」の現代的発展を受け入れることを拒み、イディッシュ語や英語、フランス語などを日常生活で使っている。語彙の点からみれば、現代ヘブライ語と聖書ヘブライ語は、かけ離れている<sup>27</sup>。それでも現代ヘブライ語の話者は、聖書ヘブライ語を容易に理解できるのか？ 総じ



て、大部分のイスラエル人は聖書のテキストを理解できる。もちろん、語彙に変化が生じているため、聖書の全てを理解できるわけではない。Zuckermannはこの語彙の変化に関し、興味深い例として、エレミヤ記の44章15節を挙げている。

*kol ha'anashim hayyod'im ki meqattrot neshehem le'elohim 'akherim* という節に関し、多くの若いイスラエル人は「自分たちの妻が異郷の神々に香をたいているのを知っている男たち」と理解するのではなく、「自分たちの妻が、他の神々に不平を言っているのを知っている男たち」と解釈する<sup>28</sup>。

Zuckermannは、イスラエル人が聖書ヘブライ語を理解できるのは、学校で学ぶからに他ならないと主張する。とはいえ、イスラエル人はまったく別の外国語として聖書ヘブライ語を学ぶのではない。願望形やいくつかの動詞形は、聖書テキスト以外でも目にするので、イスラエル人は通常それらの様式が理解できる。

Zuckermannは、現代ヘブライ語は、聖書ヘブライ語派生の言語ではないと捉えており、Chaim Rabinなどの他の研究者と同じく、現代ヘブライ語を「イスラエル・ヘブライ語」と呼んでいる<sup>29</sup>。現代ヘブライ語の現段階の状況に照らすと、現行のヘブライ語をイスラエル人のヘブライ語だけに限定する彼らの主張に筆者は同意はできない。しかし、現代ヘブライ語が、現代ヘブライ語の復興者たちの母国語だったイディッシュ語を含めて、ヨーロッパ語の強い影響を受けているという点に関しては、Zuckermann、また他の研究者の見解に賛成する。<sup>30</sup>

## 5. 現代ヘブライ語—異なる言語なのか？

現代ヘブライ語とそれ以前のヘブライ語を比較すると、主に以下のような変化が見られる。

A) 現代イスラエル人は、連結語（スミフート）をあまり使わない。例えば、*kirot habayit* (the house walls 家壁) という連結語を *hakirot shel habayit* (the walls of the house 家の壁) と言う。しかし、この文法的様式が完全に失われたわけではない。話し言葉でも使われるし、格式高い書き言葉でも使われている。話し言葉では、*beit-sepher* (school 学校) などの熟語的な連結語がよく見られる。

B) 現代ヘブライ語の話し言葉では、数詞を伴う名詞で、名詞と数詞間の性数一致が失われている。格調高い書き言葉のテキストでは使われている。研究者たちは、数十年間にわたり、現代ヘブライ語では数詞の男性形の使用をやめるように提案している。しかし、ヘブライ語言語アカデミーでは、これを受け入れず、文法的な誤りとし

ている。

C) 文章構造の語順に重大な変化がみられる。聖書ヘブライ語では、動詞－主語－目的語だが、現代ヘブライ語では、主語－動詞－目的語に変化している。

D) 現代ヘブライ語では、時に主語と動詞の数の一致が見られない場合がある。

E) 現代ヘブライ語では、(ヒフィル形の) 動詞の活用で発音に逸脱がある。また、第1人称単数未来形を第3人称単数未来形で代用することがあ<sup>31</sup>。

F) 現代ヘブライ語では、喉音の子音 (*alef, he, khet, ayin*)、及び摩擦音の子音 (*be-ve, ke-khe, pe-phe*) が喪失している。さらに、単語のアクセントやイントネーションも変化している。

G) 近年では、ヘブライ語の語彙と前置詞の用法に、英語からの強い影響がみられる。例えば、ヘブライ語では、「試合に勝つ」は、元来 “wins in the game- *lenatzeah baMiskhak*” だが、英語の影響から、“win the game- *lenatzeakh et HaMiskhak*”、すなわち「試合を勝つ」という表現が新聞紙上でさえ使われる。この現象は英語のグローバル化の影響の一部だと考えられる。

「聖書ヘブライ語」は「イスラエル・ヘブライ語」の話者にとって理解が困難か、という問いに戻ろう。筆者の経験からの印象では、高校生を含めて若いイスラエル人たちにとって、聖書ヘブライ語は、以前より難しくなっている。その主な理由は、学校教育で、聖書を学ぶ時間が減っていることにある。ラビ・ヘブライ語や中世ヘブライ語は、聖書のテキストよりも触れることが少ないため、一層理解し難い。60年—100年前に書かれたヘブライ語の著作ですら、語彙、また構造が異なるため、若いイスラエル人がそれを理解するのは容易ではない<sup>32</sup>。日本の若者にとっての明治時代の日本語に似ているだろう<sup>33</sup>。これが生きた言語がたどる変化である。

## 6. イスラエルの現代ヘブライ語—21世紀

今日、イスラエルの学校教育では、ヘブライ語は小学校1年生から高等学校の最終学年まで、国民語教育のカリキュラムとして教えられている。そこでは、様々な段階のヘブライ語の混合体、すなわち、聖書ヘブライ語から現代ヘブライ語までのヘブライ語が教えられる。現代ヘブライ語の文法は、聖書や聖書以降の段階のヘブライ語の様式に依拠して学ぶ。中世ヘブライ語のテキストも、現代ヘブライ文学や詩と同じように学ぶ。

今日の現代ヘブライ語の発展と変化を研究する際に重要なのは、新聞やラジオなどのメディアにおけるヘブライ語、慣用句やスラングのヘブライ語、そして散文及び韻

文の文学におけるヘブライ語の三領域である。イスラエルではこれらの三領域におけるヘブライ語について、言語学的及び社会的研究が大々的に進められている<sup>34</sup>。

A) 新聞、ラジオ、テレビなどのマス・メディアは、現代ヘブライ語に最も強い影響を与えている。イスラエル人の80%が、ヘブライ語でラジオやテレビを視聴し新聞を購読するからだ。[超正統派ユダヤ教徒(10%)や現代ヘブライ語でコミュニケーションができない老齢の特にロシアからの新移民は除く。彼らには、彼らのための新聞、専用のテレビ・チャンネルや他のメディア手段が存在する<sup>35</sup>。] メディアの影響は非常に大きい。そのため、イスラエルのヘブライ語の研究と発展を担う公的機関である「ヘブライ語言語アカデミー」が、新しい語彙がヘブライ語に登場する際、その語彙の認証の責任を負い<sup>36</sup>、メディアを通して普及する語彙と文法に関する新しい決定を随時公表している。

B) 慣用句やスラングは山ほどある。現代ヘブライ語においては、特に二つの文化活動が影響を与えたと考えられる。一つは *Hagashash Hakhiver* と呼ばれる3人のコメディアン<sup>37</sup>の活動だ。彼らは30年間にわたり、最も日常的な現代ヘブライ語で書かれた喜劇を舞台上で演じ、それらは今や現代「古典」となっている。彼らはイスラエルの文化発展への貢献を評価され、2000年にイスラエル賞を受賞した。もう一つは、Ephraim Kishon の活動である。Kishon は、ハンガリー系ユダヤ人で、イスラエル建国直後の1949年にイスラエルに移住した。彼は新聞にユーモアにあふれたコラムを執筆して、直ちに人気を博した。

最近、Ruvik Rosenthal が慣用句やスラングなどを含む辞書(語彙目録)を出版した。この辞書には、今日使われる現代ヘブライ語、また20世紀初頭に遡るヘブライ語の表現、軍、警察、ジャーナリズムなど特定の社会集団の「社会方言」など、幅広く収められている<sup>38</sup>。本書では、掲載されたすべての熟語、語彙に説明が付けてある。詳細な索引もあり便利だ。

言語はスラングだけでなく、ファッションや他の様々な社会的要因によっても変化する。このような言語の変化は、5年から10年またそれ以上の期間をかけて顕在化する。ヘブライ語は、確かに、ここ数十年の間このような変化の途上にあるといえる。アメリカ合衆国に数年滞在した二人の研究者 Amalia Rosenblum と Zvi Triger は、イスラエルに帰国した際、ヘブライ語の変化に驚き、この問題に関して興味深い研究結果を発表した。彼らは、単語や言い回しにイデオロギー的また文化的潜在能力を見出し、今日のイスラエルのヘブライ語の「文化言語学」の有力な事例を挙げた<sup>39</sup>。その著作の中で取り上げられた単語や言い回しは、すべて、聖書ヘブライ語やヘブライ語の他の段階の語彙や文法を使った現代ヘブライ語の表現として、現在のイスラエル

社会で流布しているイデオロギー、社会階級のテーマや目的、アラブ系イスラエル人<sup>40</sup>とユダヤ系イスラエル人の政治的軋轢、政治的な良識表現その他を伝えている。

C) 現代ヘブライ語の発展の第三の領域は、広大な文学の世界である。現代ヘブライ文学の発展史は、20世紀前半から70-80年代の段階と、90年代と21世紀初頭の変化として表すことができる。

Gershon Shaked は20世紀の現代ヘブライ文学の創造性を見事に描き出している<sup>41</sup>。現代ヘブライ語の発展とも関わる現代ヘブライ文学に関する彼の重要な見解をここで言及する必要があるろう。

19世紀末ヨーロッパ、特に東ヨーロッパのユダヤ人たちは多言語環境で生活し、少なくとも3言語を使っていた。母国語としてイディッシュ語、祈祷と聖典の学びの言語としてヘブライ語、そして地域の言語、ロシア語、ポーランド語、ハンガリー語などである。そのため彼らは翻訳者としての感覚を容易に磨ける民族であり、同時に文化的な知識を簡単に伝達できた。1890年から1920年まで、(ウクライナの) オデッサはヘブライ語による文筆活動の中心地で、教養のあるユダヤ人や学者たちがここで生活し、活動した<sup>42</sup>。しかし、ソビエト政府がヘブライ語の学習禁止を決定したのを受けて、その活動は途絶える。その後、1913年、ユダヤ・シオニスト委員会が「ヘブライ語のみを使用する」という裁決を採択し、現代ヘブライ語の中心は、パレスチナに移った。1930年代以降、ヘブライ語は、パレスチナのユダヤ人の間で、文学の言語となったのである。

ヨーロッパから離れたことで、パレスチナのユダヤ人は、正統派のユダヤ教から遠ざかり、生きたイディッシュ語からも離れることになった。ヨーロッパからパレスチナにやってきた作家たちはヘブライ語で自由に執筆活動を進め、ヨーロッパの西洋文学の文化遺産の多くをヘブライ語に翻訳した。この時代の現代ヘブライ語の作家たちは数種の言語を操り、ヘブライ語で執筆する際も、ヨーロッパの様式や言語を活用した<sup>43</sup>。同時に彼らは聖書や中世のユダヤの伝統も活用したのである<sup>44</sup>。

1940年から1980年代にかけ、イスラエル生まれの新しい世代の作家が登場した。彼らの中には現代ヘブライ語を母国語として育った者もいる。S. Yizhar, Y. Shamir, A. Megged, Haim Guri, H. Bartovなどは、イスラエルの日常生活や現実と結びついた新しい現代ヘブライ語を作品の中に盛り込んだ。A. B. Yehoshua, Amos Oz, David Grossman に代表される世代は、今日まで、実り豊かな作品を表し、今もなお活動中である。この世代が著述するヘブライ語は国家の公用語としてのヘブライ語でもある。それゆえに、作家たちはある種の様式性に縛られた。そこから自由になれたのは、前述の Gashash や Kishon などのコメディアンや風刺作家だけかもしれない<sup>45</sup>。

様式的言語からの逸脱に関しては、Dan Ben-Amotz の著作が参考になる。特に

1972年 Netiva Ben Yehuda との共著のヘブライ語のスラング辞典には、生きた現代ヘブライ語が結実している。

これまでに言及した著者のほとんどが男性で、女性は Devorah Baron や Leah Goldberg など、数人に限られる。しかし、20世紀末にかけて、現代ヘブライ文学にも女流作家たちが登場し、女性の声を強く表現している<sup>46</sup>。

言語的に興味深い取り組みを見せた若手の女流作家を二人紹介したい。一人は、Maya Arad。イスラエル生まれだが10年以上アメリカ合衆国に在住している。彼女は言語学者であるが、イスラエル社会に関わる興味深い小説やショート・ストーリーを書いてきた。その作品には言語に対するユーモアと感受性にあふれている<sup>47</sup>。もう一人の女流作家はイスラエル生まれの Shoham Smith。発表された数冊の作品のうち最も興味深いのは、2002年に発表された *Home Center* (Tel-Aviv, Miskal) であろう。この作品には、イスラエルの核家族の日々のお決まりの生活が、現在のヘブライ語の会話体でユーモラスに描かれている<sup>48</sup>。

文学的ヘブライ語の範疇には、ヘブライ語による学術書の出版、あるいは科学言語としての現代ヘブライ語の使用も含まれよう。ユダヤ学に関わる研究者はこの言語を学術手段として研鑽する必要がある。Tsuguya Sasaki が近年述べたように、現代ヘブライ語は「英語と同じく、ユダヤ学の共通言語となっている。つまり、ユダヤ学の研究者で現代ヘブライ語を自由に操れない者は、大部分がヘブライ語だけで発表されているユダヤ学の多くの領域を見落としてしまうことになり、イスラエルの学術研究へのアクセスが限られてしまうことになる。」<sup>49</sup>

## 7. 結論にかえて

聖書ヘブライ語の子孫である現代ヘブライ語は、聖書という起源からはるばる長い道程をたどってきた。それでもなお、現代ヘブライ語は、文法的にも構文上も、聖書ヘブライ語の主な特徴が残っている。現代ヘブライ語は、その復興期にインド・ヨーロッパ語族の影響を強く受けたが、その源泉であるセム語の特徴の多くは残されている。ここ100年間に、ヘブライ語は、生きた言語、話し言葉となるチャンスが与えられ、変化と影響にさらされてきた。学生や研究者が聖書ヘブライ語を学びたいのであれば、まず、現代ヘブライ語を学び、それから聖書ヘブライ語を続けるように薦めたい。

この論文のタイトルの副題「アイデンティティーを求めて」について付言したい。Hebrewあるいはヘブライ語の *Ivrit* は、ユダヤ民族が使う言語を指す名称であって、紀元前1千年にイスラエル／パレスチナの地に住んでいたイスラエル民族が使った言

葉ではない。聖書によると、彼らの言語は「ユダの言葉 *Yehudit*」（列王記下18章26節）だった。これがユダの地で話されていた言語の名称で、この言語で聖書のテキストが書かれた。*Yehudit* という語は Yehuda、すなわちユダ Judea に由来していることから、イスラエル王国（ユダに対して北王国）の言葉は「イスラエル語 *Israelit*」と呼ばれたのではないかと予想される。しかし、この名称は聖典には出てこない。北王国でも、多少の方言の違いがあったにせよ、*Yehudit* に非常に似た言語が使われていたことは明らかだ。*Ivrit* という言語の名称は、ユダヤ人を Ivri(m)/Hebrew-people とする名称から導き出された後代の定義である。つまり人種的な定義であり言語学的な定義ではない。そのために、今日、ユダヤ人の民族の名称と言語の名称は、*Yehudi* と *Ivrit* という二つの別個の単語になっている。民は、ユダ地域の出身という意味から「ユダヤ人」*Yehudi* と呼ばれ、他方、言語は、聖書のヘブライ人 H'iveri アブラハムに付された人種名から「ヘブライ語」*Ivrit* と呼ばれる。つまり、最初から、民族アイデンティティーを示す用語とその言語の名称には亀裂があった。何世紀も経て、ユダヤ人がほとんどヘブライ語を使わなくなり、彼らが居住している地域の言語を使うようになると、ヘブライ語がユダヤ人生活の宗教面におけるアイデンティティーとなった。ヘブライ語はこのような新しい役割を授けられ、更にイスラエル建国以降は、イスラエルで独立した新しいユダヤ的なもののアイデンティティーのシンボルとなったのである。

20世紀は、民族としてのアイデンティティーを求めるユダヤ人の時代であった。ヨーロッパ社会の民族主義が、ユダヤ人に民族としてのアイデンティティーの希求を生んだ。（ヨーロッパの中だけでも）様々な国々、また様々な伝統を出自としてやってきたユダヤ人たちは、ヘブライ語に民族としてのアイデンティティーとしての共通項を見出した。それは、その言語で2000年にわたって書かれ続けてきた文化伝統とも結びついているのである<sup>50</sup>。

## 注

- 1 本論文は屋山久美子氏（翻訳）、勝又悦子氏（編集）、飯田健一郎氏（校正）によりご協力いただいた。3名に多大なる感謝を申し上げる。
- 2 同様の見解は、Marc Zvi Brettler. Marc Zvi Brettler, *Biblical Hebrew for students of Modern Israeli Hebrew* (Yale University Press) 2002を参照。
- 3 聖書ヘブライ語とイスラエル・ヘブライ語の差異については、Marc Zvi Brettler の前掲書（1-4頁）を参照。例えば、「時間」を表す“zeman”という単語は、現代ヘブライ語では非常によく使われるが、聖書では、後期の書物で初めて登場する（『伝道の書』、『エズラ記』、『ダニエル書』に4回）。おそらくアラム語の影響があると思われる。聖書ヘブライ語で時や時間を示す一般的な単語は 'et であ

- る。
- 4 この立場を近年積極的に主張しているのは Ghil'ad Zuckermann である。彼については、後述。註25を参照。
  - 5 本稿は、ヘブライ語入門者へのヘブライ語概論であり、同時に、ヘブライ語研究の最新の問題に関する文献紹介である。現代ヘブライ語の邦語入門書は以下のようなものがある。辞書：キリスト聖書塾編集部（編）『現代ヘブライ語辞典』（キリスト聖書塾）、1984年；ミルトス・ヘブライ文化研究所（編）『日本—ヘブライ語小辞典』（ミルトス）、1993年。文法書：キリスト聖書塾（編）『ヘブライ語入門』（キリスト教聖書塾）1985年；栗谷川福子『ヘブライ語の基礎』（大学書院）1998年；池田潤『ヘブライ語のすすめ』（ミルトス）1999年；山田恵子『エクスプレス 現代ヘブライ語』（白水社）2005年。ちなみに、筆者は、現代ヘブライ語を母国語として生まれ育った。しかし、ヘブライ語は筆者の両親の母国語ではない。彼らは、イスラエル建国直後にイスラエルに移住し、10代でヘブライ語を習得した。それ故、筆者は子供時分、ヘブライ語以外に数種の言語を聞いて育ち、そのうちの一つは流暢に話すこともできる。しかし、ラジオ、新聞、ゲーム、友達を通して筆者を包みこみ、また最初に読み書きを習い、「私の言葉」と感じ、夢の中で使う言語は、今日イスラエルの内外でユダヤ人が使うヘブライ語なのである。
  - 6 SBL フォーラムでの発表論文 “Kiling a Dead Language: A Case against Emphasizing Vowel Pointing when Teaching Biblical Hebrew” については以下の URL <http://www.sblsite.org/publications/Article.aspx?ArticleId=675> を参照。
  - 7 最も有力な理由は、「これらの母音記号は、元からあったものではないし、歴史的な確証がない」ことである。母音記号なしで教える現代ヘブライ語が、聖書ヘブライ語を教える際に重要な役割を持つという筆者の主張の証左にもなる。
  - 8 ヘブライ語でニクード *niqud* は母音を表すための記号で、紀元後初期にヘブライ語聖書に導入され、紀元後7世紀までに制度化された。それ以後、聖書のテキストには、トラーヤや祈禱書を朗読するユダヤ人のためにこの母音記号が記された。ニクードの音声システムやその機能（母音、個々の単語のアクセント、旋律）についての詳細は、Israel Yeivin, *Introduction to the Tiberian Masorah* (translated by E. J. Revell; Missoula, Mont. : Published by Scholars Press for the Society of Biblical Literature and the International Organization for Masoretic Studies, 1980); Shelomo Morag, *The vocalization systems of Arabic, Hebrew, and Aramaic : their phonetic and phonemic principles* (Hauge, Mouton) 1962 ; Aron Dotan, “The Relative Chronology of Hebrew Vocalization and Accentuation”, *Proceedings of the American Academy for Jewish Research*, Vol. 48, (1981), pp. 87-99. を参照。
  - 9 ニクードがあると、子供たちは母音表記システムに慣れるどころか、むしろ不正確に母音を用いることになる。
  - 10 <http://www.sbl-site.org/publications/article.aspx?articleId=756>
  - 11 世界各地のユダヤ共同体で、現代ヘブライ語の学習はユダヤ人の青少年たちのユダヤ教育の中心とみ

- なされている。1990年までの世界中のユダヤ人教育に関しては *Jewish Education Worldwide: Cross-Cultural Perspectives*, edited by H.S. Himmelfarb & S. DellaPergola (University Press of America 1998) を参照。
- 12 ヘブライ大学ユダヤ・ディアスポラの伝統と言語研究センターは、ユダヤ人のヘブライ語の様々な伝統に関する研究を、Shlomo Morag 教授の編纂のシリーズで1977年から2004年まで刊行してきた。今日的視点からのヘブライ語の概論は、Gelenda Abramson 編の *Encyclopedia of Modern Jewish Culture* (London: Routledge; 2004) 358-361, Chaim Rabin と Ghil'ad Zuckerman, “Hebrew” の項目を参照。
- 13 聖書時代以前、また聖書時代のヘブライ語の歴史についての詳細は、A. Saenz-Badillos の *A History of the Hebrew Language* (Cambridge: 1993 transl. John Elwolde), pp. 29-75, 特に、pp. 54-56を参照。
- 14 これについて、B. Halpern, “Dialect Distribution in Canaan and the Deir Alla Inscriptions,” in *Working with No Data: Semitic and Egyptian Studies Presented to Thomas O. Lambdin*, ed. David M. Golomb and Susan T. Hollis (Winona Lake, 1987). S. A. Kaufman, “The Classification of the North West Semitic Dialects of the Biblical Period and Some Implications Thereof,” in *The Proceedings of the Ninth World Congress of Jewish Studies: Panel Sessions, Hebrew and Aramaic* (Jerusalem, 1988) 41-57. G. A. Rendsburg, “The Dialect of the Deir Alla Inscription”, *Bibliotheca Orientalis* 50 (1993) 309-28. Idem, *Linguistic Evidence for the Northern Origins of Selected Psalms* (Atlanta) 1990を参照。邦語では、池田潤「旧約聖書の言語——ヘブライ語の起源と歴史」『言語』2003年12月号68—74頁。
- 15 以下の文献を参照のこと。G. I. Davies, *Ancient Hebrew Inscriptions: Corpus and Concordance* 1, 2 vols. (Cambridge: 1991, 2004); F. W. Dobbs-Allsopp et al., *Hebrew Inscriptions: Texts from the Biblical Period of the Monarchy with Concordance* (Yale University) 2005; Shmuel Ahituv, *Haketav Vehamiktav: Handbook of Ancient Inscriptions from the land of Israel* (Jerusalem: 2005).
- 16 唯一、写本間で差異がみられるのは、死海写本の聖書テキストである。E. Tov, *Textual Criticism of the Hebrew Bible* (Fortress, 2ed.) 2001を参照。
- 17 ミシュナ・ヘブライ語の発展の起源に関しては、G. A. Rendsburg, *Diglossia in Ancient Israel* (New Haven) 1990を参照。ミシュナ時代については、Saenz-Badillos, *ibid*, pp. 161-201を参照。
- 18 D. Ginsburg の最近の詳細な研究 *Rabbi Moses Gikatila's and Rabbi Abraham Ibn Ezra's translations of Rabbi Juda Hayyuj's treatises – a comparative study* (Ramat-Gan) 2007参照。
- 19 Ezra Fleisher and Abraham David, “Piyut”, *Encyclopedia Judaica* (second edition, vol. 16, 2007) 192-195, 196-209を参照。邦語では、勝又直也「ユダヤ教史再考——中世ヘブライ文学からの試み——」『宗教史とは何か(上巻)』(リトン)2008年、199—227頁。以下のサイトも興味深い。<http://www.piyut.org.il/about/english/>。初期のパイタニーム *paytanim* は、すでに6世紀のエレッツ・イスラエルで記録されているが、後に10世紀から13世紀にかけて活躍し、18世紀までヨーロッパ大陸で彼らの活動は続いた。今日もなお新しいピユートが創作されている。
- 20 紀元後870年から1800年の間のヘブライ語については、エジプトの Fustat's Ben-Ezra Synagogue のグ



- ニザ文書から多くを学ぶことができる。Geniza Project of Princeton University <http://www.princeton.edu/~geniza/>; Cambridge University Collection <http://www.lib.cam.ac.uk/Taylor-Schechter/>; を参照。
- 21 Ezra Spicehandler, “Hebrew Literature”, in Glenda Abramson (ed.), *Encyclopedia of Modern Jewish Culture*, (London: Routledge; 2004) 361-363参照。
- 22 19–20世紀のヘブライ文学の発展については、Ezra Spicehandler の前掲書, pp. 363-367を参照。また、Gershon Shaked, *Modern Hebrew fiction* (translated from the Hebrew by Yael Lotan; edited by Emily Miller Budick; bibliography compiled by Jessica Cohen (Bloomington : Indiana University Press ; 2000) も参照。近現代ヨーロッパでのユダヤ人の民族意識についての邦語文献では、早尾貴紀『ユダヤとイスラエルの間で—民族／国民のアポリア』、青土社、2008年。特にアイデンティティーとしての現代ヘブライ語の機能については同書131-132頁。
- 23 Ben Yehuda に関する著書には、Malka Drucker , *Eliezer Ben-yehuda* (Jewish Biography Series) (1987) が挙げられる。邦語では、ロバート・セントジョン『ヘブライ語の父ベン・イエフダー』(島野信宏訳) (ミルトス) 2000年。
- 24 「イスラエル・ヘブライ語 Israeli Hebrew 」に関する概略は Saenz-Badillos の前掲書, pp. 272-286を参照。B. Harshav, *Language in time of revolution* (Los Angeles: University of California Press) 1993.
- 25 以下、最新の現代ヘブライ語文法に関する著書である。
- L. Glinert, *The Grammar of Modern Hebrew* (Cambridge: 2004).
  - E. Amir Coffin and S. Bolozky, *A reference Grammar of Modern Hebrew* (Cambridge: 2005).
  - Eduard Yechezkel Kutscher (edited by Raphael Kutscher), *A history of the Hebrew language* (Magnes Press, Hebrew University: 1982).
- 26 Ghil'ad Zuckermann, “A New Vision for Israeli Hebrew: Theoretical and Practical Implications of Analyzing Israel’s Main Language as a Semi-Engineered Semito-European Hybrid Language”, *Journal of Modern Jewish Studies* 5.1: 57-71, を参照。この論文は以下のサイトにある : <http://www.zuckermann.org/pdf/gz6.pdf> .
- さらに、テルアビブ大学の Shlomo Izre’el の議論も参照のこと。彼は、このヘブライ語の復興を「クレオ化 “Creolization” と称している。“The Emergence of Spoken Israeli Hebrew”, in: Benjamin H. Hary (ed.) *Corpus Linguistics and Modern Hebrew: Towards the Compilation of The Corpus of Spoken Israeli Hebrew (CoSIH)*; (Tel Aviv: Tel Aviv University, The Chaim Rosenberg School of Jewish Studies. 2003) 85-104: <http://www.tau.ac.il/humanities/semitic/emergence.pdf> . を参照。
- 27 ヘブライ語の著書、Rachel Trozki, *Hazika veHaneteq Shebein HaIvrit Hamodernit Lileshonot HaIvrit Haqdomot: Nituakh Hshvaati Shel Qishrei Hamishpat Hamurkav Leiphayun ‘azmiyut HaIvrit Hamodernit* (Tel-Aviv 1994) を参照。
- 28 Zuckermann, 前掲書, (PDF ファイルでは p. 13)。彼は他にもいくつかの誤解されやすい語彙を例示している。

- 29 前掲書 pp. 360b-361a 註6を参照。
- 30 我々は、現代ヘブライ語を幅広く定義するべきだろう。というのも、現代ヘブライ語はもともとイスラエルだけで話されていたわけではなく、第二次世界大戦までは、世界各地のユダヤ人の共同体の多くでも話されていたからだ。かつての現代ヘブライ語の主要な地域は、ロシアと東ヨーロッパだった。今日では、例えば、アメリカ合衆国、南アメリカ、オーストラリアに、ヘブライ語を日常言語として使うユダヤ人やイスラエル人が在住している。彼らのヘブライ語には、イスラエルに在住するユダヤ人のヘブライ語とは違った、彼らの母国語の影響を受けた特徴がある。
- 31 第1人称単数未来形の動詞の接頭辞はアレフ *aleph*。である。しかし、最近、イスラエル人は、第1人称単数が想定される場合に、往々にして聞こえがいいという理由で、第3人称単数の接頭辞であるユド *yud* を使うことがある。すなわち、「私はあなたに言います "I will tell you" という文が "*ani asaper lecha*" ではなく、*ani yesaper lecha*" となる。
- 32 60-80年前にヘブライ語に翻訳されたヨーロッパの古典作品、小説、哲学などの多くの著作が、近年、新たな現代語訳によって再出版されている。
- 33 日本語と現代ヘブライ語の比較研究に関しては R. Kowner & J. Rosenhouse, "Cultural Policy on Loanword Adoption in Modern Japanese and Hebrew: A Comparative Study", *International Journal of Cultural Policy* 7/3 (2001) 521-548を参照。
- 34 例えば、以下の著作。Shlomo Haramati, *Ivrit Chaya bemrutsat Hadorot* (Masada, Rishon Lezion; 1992); Adina Abadi, *Discourse Syntax of Contemporary Hebrew* (Magnes Press, Jerusalem) 1988; Yossef Dana, *Ivrit-Aravit Al Tzir Hazman* (Haifa, 2000)。
- 35 超正統派ユダヤ教徒は、ヘブライ語ではなく、イディッシュ語の新聞を刊行していた。しかし近年、彼らもヘブライ語新聞を刊行するようになった。また、ラディーノ語やルーマニア語の新聞も刊行されていたが、世代交代して購読者は激減した。次世代のイスラエルの若い世代はヘブライ語で読み書きするからである。1990年代にイスラエルに到着したロシア系移民たちは彼ら独自のコミュニティを形成し、新聞に加えて、衛星放送、ケーブル・ネットワークを通したロシア・テレビ局を設けている。これらのロシア系移民の老齢層の多くは、ヘブライ語を習得せずにイスラエルで生活している。
- 36 ヘブライ語言語アカデミーについては、: <http://hebrew-academy.huji.ac.il/> を参照。「ヘブライ語に関する最高機関として、ヘブライ語の歴史的発展に基づいて、現代ヘブライ語の文法、正書法、転写法、句読法の基準を制定すること」を目的として、1953年に公式に創設された。
- 37 この三人組のコメディアンは、Yeshayahu Levi ("Shaiké"), Yisrael Poliakov ("Poli") Gavriel Banai ("Gavri") は Nisim Aloni, Yossi Banai, Dan Almagor などの有名作家の支援を受けていた。
- 38 *The Lexicon of Life: Israeli sociolects & Jargon* (Keter, Jerusalem) 2007. ヘブライ語のタイトルは、*HaLeqsiqon shel HaHayim: Safot BaMerkhav HaIsraeli*.
- 39 Amalia Rosenblum and Zvi Triger, *Speechless: How Contemporary Israeli Culture is Reflected in Language* (Kinneret, Zmora-Bitan, Dvir- Publishing House, Or-Yehuda; 2007) 9-31 (序を参照)。

- 40 アラブ人でイスラエル内に居住し、イスラエルの市民権を有する人々。彼らはアラビア語もヘブライ語も流暢に話す。
- 41 Shaked の著作の縮約版は Yael Lotan によって翻訳されている : G. Shaked, *Modern Hebrew Fiction* (ed. Emily Miller Budick; Indiana University Press) 2000.
- 42 Shalom Aleichem, I. L. Peretz, M.Y. Berdyczewsky, H. N. Bialik, Agnon and Y. H. Brenner, U. N. Gnessin などが含まれる。
- 43 彼らは、ロシア、ドイツ、スカンディナヴィアの著名な作家の影響を受けて小説を書いた。Y. D. Berkowitz and Asher Barash in G. Shaked, 前掲書, pp. 41-44を参照。
- 44 S. Ben Zion in G. Shaked, 前掲書 pp. 39-40を参照。
- 45 For a long and detailed description of those periods see Gershon Shaked, *Hebrew Narrative Fiction 1880-1980 V* (Hakibbutz Hameuchad; Tel-Aviv; in Hebrew) 1998.
- 46 著名なイスラエル人女流作家のショート・ストーリー選集は、Lily Rattok (ed.) の編集で発表されている。 *The Other Voice: Women's Fiction in Hebrew* (Tel-Aviv, Hadekel) 1994.
- 47 *Makom Akher veir Zara* (2003); *Sheva' Midot Ra'oy* (2006); *Temunot Mishpacha* (2008) が代表作。
- 48 Shoham Smith について、New Hebrew Literature Lexicon: <http://library.osu.edu/sites/users/galron.1/00570.php> を参照。彼女の代表作には、*My heart tells me that my memory betrays me* (Keter, Jerusalem) 1996; *Eretz Tik-Tak* (Keter, Jerusalem) 1997; *TakeAway* (Tamuz, Tel-Aviv) 2002; *Six Great Heroes in the World Mythology* (Or Yehuda) 2006がある。
- 49 T. Sasaki, "The place of Modern Hebrew as a lingua franca of Jewish studies", *Language Problems and Language Planning* 31:2 (2007) 136. 同論文の脚注でも同趣旨の指摘がされている——ヘブライ語研究の多くがイスラエルでヘブライ語で行われている。
- 50 訳注：“nation” は時代、文脈に応じて民族／国民／国家の概念が錯綜する用語であるが、本稿では「民族」に、“nationalism” は「民族主義」に統一した。